

- 一年を振り返って
- センター試験会場決定



先輩からの言葉

「出会いによって織りなされた道」 高橋 玲子 33 回生

(昭和 56 年卒) 米国在住、クリエイティブ・ディレクター

高校時代の私はまぎれもない劣等生だった。勉強でもスポーツでも、何にでも真面目に一生懸命取り組む優秀な同級生の中で、周囲の流れに抗って、みんなとは違う自分を探し、思い悩んではもがき、もがいてはあきらめて、結局はやるべきことをやらない。そんな日々だった。

それから 35 年、私は今、米国シカゴにある世界各国の人道奉仕活動を結ぶ非営利法人・国際ロータリーの世界本部で、クリエイティブ・ディレクターとして働いている。世界 135 か国に 130 万人の会員を持つ国際組織のコミュニケーションを統括する部署で、英語を中心に 9 か国語を使って、マーケティング戦略や PR に関する企画と制作に多忙な毎日を過ごしている。

あの落ちこぼれだった高校生が、いつのまにかこんなことになっていた。決してここを目指してやって来たわけではないし、英語が得意だったわけでもない。いろいろな偶然が重なった結果でしかないのだが、今思えば、人生のいくつかの岐路において、いつも誰かに助けられ、いい方向に導いてもらってきた。

米国に渡ったきっかけは、20 年前の夫の突然の留学志願だった。当初は、ふたりで生活するために十分な収入を得られる保証のないことを理由に、日本でやっていたグラフィック・デザイナーの仕事を手を辞めて同行することをためらった私だったが、たまたま休暇で訪れた夫の留学先で、私の作品を見てくれた人が雇用主を紹介してくれた。自分でも驚くほどあっけなく就職

自分の才能を見つけたい、そしてそれが生きるような仕事に就きたい。そう思いながらも、はっきりとした将来への道が見えないまま、普通に受験勉強するよりは面白そうという理由だけで美術大学を選んだ。

その後、夫の博士課程修了とともに、人口 8 万人の大学街から米国第 3 の都市シカゴへの移転が決まる。この時も、親しくしていた友人の繋がりから、シカゴでの就職先を紹介してもらえることとなった。それが私の米国での第 2 の職場となり、現在も勤める国際ロータリー世界本部である。幸いなことに、今までハンデだと思っていたヘタな英語も、この国際組織という環境の中で、逆に「日本語ができる人」「異文化を理解する人」という大きな強みに変わっていった。そしてそういう私を理解し伸ばしてくれようとする上司や同僚にも恵まれ、仕事が俄然楽しくなった。職場の支援を受けて大学院で学ぶ機会も貰い、仕事をしながら修士を取得し、それが現職へのキャリアアップにも繋がった。

今でも毎日の仕事はチャレンジの山積みであり、必死でしがみついていることには変わりはない。けれども、自分を生かして自分らしく生きたいと思った高校時代の思いには、なんとなく近づいているような気がする。そして思い返せば、いつも人に助けられてきた。人生のさまざまな地点で巡り会う人たちと、いい関係を築いて来られたこと。結局それが私の一番得意なこ

が決まり、「アメリカで仕事する」という、考えもしなかった冒険に踏み出すことになったのである。

けれども、あっけなく決まった就職とは裏腹に、周りに日本人がひとりもない職場環境で、100パーセント英語でこなす仕事はきついものだった。カルチャーショックも半端ではない。勘違いや失敗を繰り返し、いつクビになるかと毎日ひやひやししながら、それでもここを失ったら行く先がないと、必死でしがみついた。そんな悪戦苦闘を繰り返す私に対して、周りにいた米国人同僚たちは寛大で、どんな時にもあたたかい言葉をかけてくれた。十分な準備もしないまま飛び込んだ異文化の中で、異文化を認める周囲の仲間たちに励まされ助けられて、どうにか最初の会社での4年間を生き延びることができたのである。

とだったのかもしれない。

しばしば進路は、自分で選び自分で切り開くものと強調される。しかし、私の歩んできた道を振り返ると、他から選ばれ導かれて、切り開かれてきた道でもあると思う。たとえ十分な準備ができていないと思うときでも、与えられたチャンスにのってみる。チャンスの影には必ず見ていてくれる人がいる。それが原動力になって、私の道は織りなされて来たのだと思う。

高校生のみなさん、人生は出会う人でできています。友人を大切にしてください。出会いには必ず理由があります。いい出会いを見逃さないよう、アンテナを広げておいてください。ひとつの出会いがどこでどう繋がって開けていくかわかりません。そしてそれは仕事に限らず、人生のひとこまひとこまを豊かにしてくれるものと、私は信じます。

(朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。)